

# 「地域とともに歩む学校づくり」フォーラムの開催について（報告）

- 1 日時 平成20年6月9日（月） 10:00～16:15
- 2 場所 千葉県総合教育センター 大ホール
- 3 参加者 市町村教育委員会・学校関係者・コーディネーター  
学校支援ボランティア・NPO関係者等 124名
- 4 内容

○第1部 基調講演「今なぜ、地域の力が学校づくりに必要なのか？」  
講師：前・東京都杉並区立和田中学校長 藤原 和博 氏



会場の様子

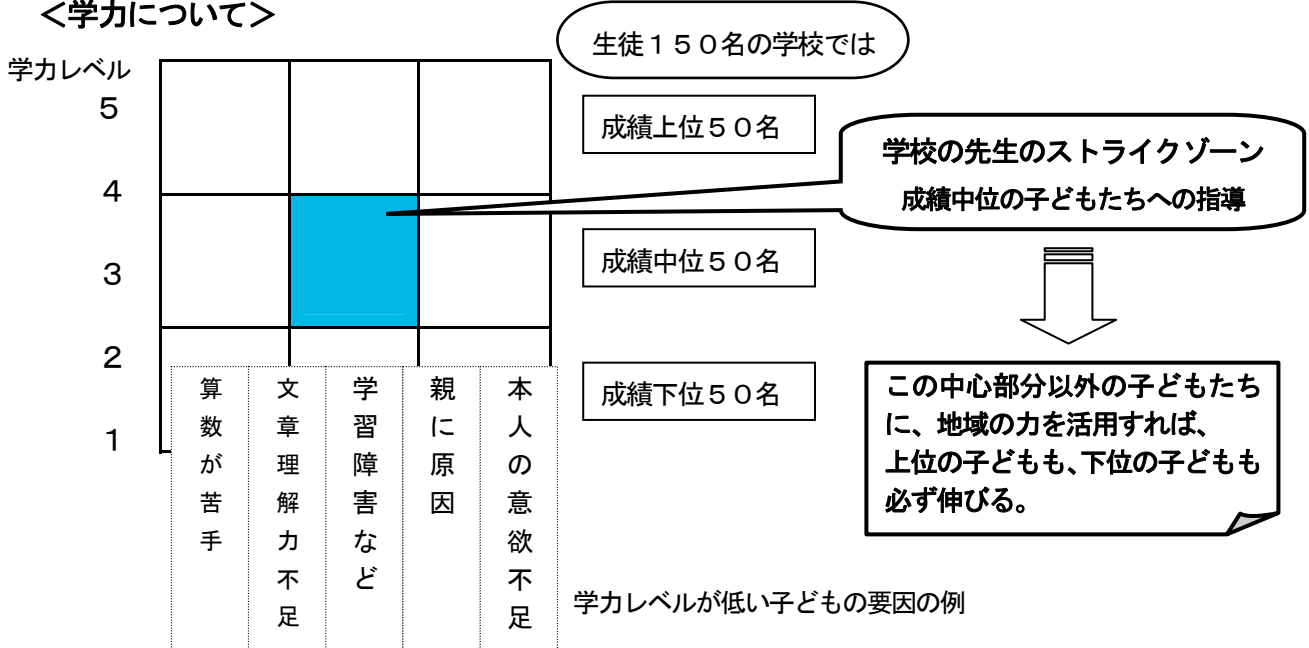


藤原 和博 氏

### 【 講演要旨 】

- ・ 現在、学校は地域をパートナーとして「共同経営」していかないとたない状況にある。
- ・ 学校にとって地域の支援は「あればいいな」ではなく、危急の課題である。
- ・ 本来学校では、「学力向上」と「生活指導」を教えるところであった。
- ・ 国の「学校支援地域本部事業」は「学習支援」をその中心とする事業である。
- ・ 子どもと大人と一緒に学べる「出島」を学校内につくる。例えば、「よのなか科」。
- ・ 議論して思考する力を高める（PISA型）には、「よのなか科」の取組が参考になるはずである。  
→ VTR視聴
- ・ 地域の人たちを学校のインサイダー（味方）にすると、クレーマーにならなくなる。
- ・ そのためには、授業などを地域と一緒にやってやる方が効果的。
- ・ しかし、「丸投げ」は絶対にダメ。あくまでも学校が主体になる。

### <学力について>



## <生活指導について>

- ・地域に応分の責任をとってもらおう。
- ・地域の人たちが一緒にやったらクレーマーにならない。
- ・「地域の力」と一般的に言ってもダメ。誰なのか？どこにいるのかをブレイクダウンすることが必要である。
- ・地域に戻ってくる団塊の世代を味方につけることが重要である。
- ・身近なものすべてが教材。

## <TIMSSとPISA>

- ・TIMSSは情報処理力 → 正解を導き出す力 → ジグソーパズル
- ・PISAは情報編集力 → 納得解を考える力 → レゴ
- ・戦後の日本はジグソーパズルを早く完成させる子どもを育ててきた。
- ・しかし、絵を描くことができない子どもたちが増えた。
- ・昔は一般解としての幸せがあったが、今はもう無くなっている。
- ・親のようになりたくてもなれない。そのことに子どもたちは気づき始めている。
- ・だから、何事にもクール。

## <地域社会の要件>

- ・出て行った人たちが地域に戻ってくる。
- ・多世代間の交流。(大学生と団塊の世代など)
- ・自己犠牲による貢献ではなく、「つながり」や「結びつき」が大切。  
→ 和田中での実践例 VTR視聴

## <まとめ>

- ・「ふれあい」ではなく、むしろ「学校支援」のために「地域の力」の活用が大事。
- ・予定調和ではなく、正解のない問題に取り組んでいく「情報編集力」が求められている。
- ・学校を核とした地域支援本部の取組が地域社会の新たな「つながり」となる。

○第2部 問題提起 市町村教育委員会及び参加者への調査から  
県教育庁教育振興部生涯学習課  
主幹兼学校・家庭・地域連携室長 東條 三枝子

- ・藤原先生は和田中学校で、「学校の運営に地域の人的パワーを取り込んだ、地域ネットワーク型の学校づくり」を進めてきた。
- ・参考にできる場所は、ぜひ地域の実情に応じて生かしていただきたい。
- ・県教委では、本年度「千葉県教育の戦略的ビジョン」を実現していくための中核的な事業として、地域のみんなが学校運営や教育活動に主体的に参画していく、「地域とともに歩む学校づくり」を位置付けている。
- ・すでにそれぞれの地域で、保護者や地域の方々が、学校教育活動や安全な登下校のサポートなどの取組が実施されている。
- ・市町村においては、それぞれの事業推進に国の新規事業である「学校支援地域本部事業」を有効に活用していただきたい。

### <本フォーラムの参加者等へのアンケート調査の集計結果からの課題検証>

- ・市町村教育委員会と学校が一体となった推進体制があるのは約半数であった。
- ・学校支援のためのプログラムを企画・運営する代表者が一堂に会する会議の開催は、約6割の学校で実施されていない。
- ・実施しているプログラムは、学校教育活動と社会教育活動の双方が実施されている。
- ・学校支援ボランティア導入による成果については、  
①学校の活性化や、教育活動等の充実 ②地域の活性化やコミュニティづくり  
の2つが多かった。

- ・課題については、ボランティアやコーディネーターの人材確保が最も多かった。
- ・また、学校にニーズとボランティアの意識の違いをあげた市町村もあった。

#### ＜国の学校支援本部事業を活用する上での課題＞

- ・地域の人材確保、教育委員会担当課の職員の配置、学校のニーズの把握、組織づくり、予算の確保、空き教室の確保 など多くの課題があげられた。

□分科会において、それぞれの地域における課題やその対応状況などについて、協議いただき問題解決のためのヒントを見つけていただきたい。

## ○第3部 分科会 問題提起での課題について協議



分科会 1	市町村教育委員会
分科会 2	市町村教育委員会
分科会 3	学校関係者
分科会 4	コーディネーター 学校支援ボランティア NPO関係者

分科会 4の様子

### ＜分科会 1・2 市町村教育委員会＞

- ◇人材確保について
  - ・登録をしている人たちと、学校のニーズを合致させていくことが大切。
  - ・教職員の意識改革が大切。
  - ・コーディネーターは学校と地域の両方がわかっている人物が望ましい。
- ◇ニーズについて
  - ・学校から地域への情報発信が大事である。
  - ・ニーズが多様なので、学校・地域にあったものを選択する。
  - ・学校と地域の接点がないことから、相互にニーズを理解していない。
- ◇推進組織について
  - ・教育委員会内部でもコンセンサスがとれていない。
  - ・学校との調整が難航。
  - ・既存の類似事業委員会との関係が困難である。
- ◇その他
  - ・学校の管理職の意識改革が大事。
  - ・教育委員会の意識改革も必要。
  - ・市町村独自のやり方を存続したい。

### ＜分科会 3 学校関係者＞

- ◇人材確保について
  - ・自治会、婦人会、年輩の方々など身近なところから広めていく。
  - ・地域の実態を知る必要がある。
- ◇ニーズについて
  - ・校長自身がどのようなニーズをもっているのかが大事。
  - ・中学校ではキャリア教育にニーズがあると考えている。
  - ・学校としてはニーズを現在集約中である。
- ◇推進組織について
  - ・教頭の役割が大きい。
  - ・ゲストティーチャーのコーディネートを扱う組織が必要。

### ＜分科会 4 コーディネーター・学校支援ボランティア・NPO関係＞

- ◇横のつながり、人材確保、学校との関わり等について
  - ・校長からのアプローチが学校支援のきっかけとなった。
  - ・「おらが学校」という意識が大事。
  - ・学校が「また来たい」という魅力ある場所になることが必要。
  - ・人材確保は「誰でも良い」ではなく、最初是一緒に活動している仲間から。
  - ・学校に要求するだけでなく、お互いを理解することが大切である。

- ・学校が目的意識を明確に地域や保護者に出して欲しい。
- ・学校からのニーズに基づいて活動するので、対立することはない。
- ・当初は、教員からの抵抗が強く、理解してもらえるのに3年くらいかかった。
- ・はじめは、学校が求めている事だけをやって、学校との関係が構築されてから次へ。

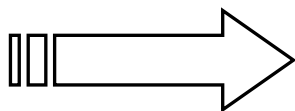
○第4部 全体会 フォーラム  
「今こそ、子どもたちのために、みんながつながろう」  
ファシリテーター 千葉県教育庁教育次長 榎本 剛



フォーラムの様子

【発表者の自己紹介】

【事例発表】



<事例発表表>

□市町村教育委員会	市川市教育委員会生涯学習部地域教育課主幹 篠崎 道成 氏
	「コミュニティサポートについて」
□学校関係	流山市立北部中学校長 湯浅 武晴 氏
	「地域の力を借りて」今できることから
□コーディネーター	木更津市立祇園小学校、第二中学校 長谷部理絵 氏
	「コーディネーターの役割について」
□学校支援ボランティア	野田市立岩木小学校 本郷 睦美 氏
	「ボランティアを通して、子どもたちとよりよい教育環境を」
	岩木小学校「本のはらっぱ」「ランチルーム」
	の政策と維持継続の大切さ
□NPO関係者	船橋市 ESO大穴小ボランティア 鈴木 誠 氏
	「ESO大穴小ボランティア活動報告」

【会場からのQ&A】

Q：どのような方法でボランティアを集めているのか？

A：町内の回覧板を使っている。口コミでも広がっている。(ESO大穴小ボランティア)

Q：ボランティアの活動は学校からの依頼なのか？

A：事務局に学校から連絡がある。(ESO大穴小ボランティア)

Q：教育相談などの活動についてはどうか？

A：以前、LDやADHDの子どもがいた時は、相談にのったこともあったが、基本的に専門家ではないので、先生と相談して対応するようにしている。(ESO大穴小ボランティア)

Q：市川市では市全体でコミュニティサポート事業を実施しているが、学校ごとに取組や体制に違いはあるのか？

A：地域によって温度差がある。課題が多様化しており、課題別の部会を開催して協議している。(市川市教育委員会地域教育課)

Q：学校を支援する上でどのようなことに配慮しているか？

A：今でこそ学校に受け入れられているが、はじめはやはり先生方に理解してもらえなかった。しかし、教育委員会がしっかりとサポートし、学校支援ボランティアの仕組みをつくってくれたのでうまくいった。(木更津市コーディネーター)

A：学校とボランティアがよく話をすることで、理解を深めた。

はじめは、地域が学校に入って良いのか不安であったが、学校が広い心で受け入れてくれた。

(野田市学校支援ボランティア)

Q：情報の管理はどのようにしているのか？

A：市川市では、全ての学校でコミュニティサポート事業を実施しているため、それぞれの地域（学校）ごとに情報を管理している。（市川市教育委員会地域教育課）

A：市教育委員会で一元化して管理している。（流山市教育委員会生涯学習課）

#### 【分科会の報告】

- ・前述のとおり。

#### 【発表者から一言】

○市川市教育委員会地域教育課 篠崎 道成 氏

- ・藤原先生のようなスーパーコーディネーターはなかなかいない。
- ・コーディネーターの善し悪しで変わる。
- ・コーディネーター育成のしくみづくりが急務。
- ・行事は子どもたちの健全育成のために行う。

○流山市立北部中学校長 湯浅 武晴 氏

- ・地域が学校に係らなければならない時期にきている。
- ・教育の現場を地域によく理解してもらうことが必要。

○木更津市立祇園小学校、第二中学校

コーディネーター 長谷部理絵 氏

- ・コーディネーターやボランティアについて改めて勉強できた。
- ・学校・家庭・地域の3つが善の循環となれば、みんなが幸せになる。トライアングルハッピー。

○野田市立岩木小学校

学校支援ボランティア 本郷 睦美 氏

- ・今日は素晴らしい機会をいただいた。
- ・人を動かすのは、人の心を動かすこと。心を開くことだと感じた。
- ・失敗を笑い飛ばす気持ちが必要。

○船橋市 ESO大穴小ボランティア

鈴木 誠 氏

- ・ボランティアを始めて、いい人生を送っている。
- ・もっと地域で広がっていきたい。

#### 【まとめ】

□本日の協議の内容は大きく3つのことに分けられる。

（人の問題）

- ・校長のリーダーシップ、先生方の意識改革、ボランティアの発掘、コーディネーターの役割など

（中身の問題）

- ・学校のニーズ、ボランティアが学校に入ることへの調整

（お金の問題）

- ・お金の使い方、お金をどのように工面するか技術的な面

□できるところから、少しずつ取り組んでいくことが大事。

□正解が一つあってそれをやればいいというのではなく、各地域にはいろいろな課題があることから最適解をそれぞれに最も適切なあり方をつくっていったら良いと考える。